

小児急性中耳炎症例における amoxicillin/clavulanic acid (14 : 1) 投与による上咽頭検出菌の変化 — 3歳未満の症例における検討 —

富山 道夫

とみやま医院

2007年に当院を受診した3歳未満の急性中耳炎のうち、上咽頭より *S. pneumoniae*, *S. pyogenes*, *M. catarrhalis*, *H. influenzae* のいずれかが検出された症例105名を対象として、amoxicillin/clavulanic acid (AMPC/CVA (14 : 1)) 投与を7日間行った。投与前後の上咽頭検出菌の変化を検討した。投与前の検出菌は、*S. pneumoniae* 42株 (27%), *S. pyogenes* 4株 (3%), *M. catarrhalis* 14株 (9%), *H. influenzae* 95株 (61%) で、菌消失率は *S. pneumoniae* 88%, *S. pyogenes* 100%, *M. catarrhalis* 100%, *H. influenzae* 52% と、*S. pneumoniae*, *M. catarrhalis* は *H. influenzae* に比し有意に高い菌消失率を示した。投与後の検出菌57株中 *H. influenzae* は47株 (82%) と高率に検出され、この内38株は ampicillin (ABPC) 耐性 *H. influenzae* であった。β-lactamase 産生 *H. influenzae* の検出率は、投与前95株中7株 (7%) から投与後47株中10株 (21%) と有意に上昇した。AMPC/CVA (14 : 1) 投与後は、β-lactamase 産生株などの ABPC 耐性 *H. influenzae* の残存に注意する必要がある。AMPC 投与症例と AMPC/CVA (14 : 1) 投与症例を比較すると、*S. pneumoniae*, *M. catarrhalis*, *H. influenzae* いずれも AMPC/CVA (14 : 1) 投与症例が高い菌消失率を示し、*M. catarrhalis*, *H. influenzae*, β-lactamase non-producing ABPC sensitive *H. influenzae* では有意差を認めた。上咽頭よりの除菌に関して AMPC/CVA (14 : 1) が AMPC より有効である可能性が示された。